音楽家として、自分の来し方にそのモチヴェイションを探せば新宿高校ということになると 僕は確信している。半世紀前の母校に音楽的な刺激や環境があったわけではない。それどころか、教育的見地から言って最もふさわしくない物の櫛比のなかにあった。秋の日、校門辺りで舞う鎌鼬(かまいたち)を眺めて友がつぶやいたのを思い出す――見ろ、新宿じゅうの埃が集まってきているぜ。

猛烈な雑駁さ…優秀な学校。同時に雑駁な輩が集まってきているのが新宿高校だった。音楽も、そこに含まれていた。シューベルトの歌曲集「冬の旅」全曲をドイツ語で歌うK。原語でのカンツォーネの数々をレパートリーにしているS。KもSも放課後に僕を残してピアノ伴奏をさせ、個人的満足度を充足させるのだった。

幼いころからの「作曲遊び」に加え、中学の 吹奏学部でクラリネットを吹いていた僕は、そ れを継続させたかったが、新宿高校にその種の 部活はなく、僕は仕方なく、当時朝日新聞社が 全国展開をしていたジュニアオーケストラに入 団した。ところが、音楽高校生などエキスパー トの卵の集団。「やめちまえ!」

で、学校の廊下に貼った手作りのポスター「管弦楽クラブを作ろう」――集まった。しかし主要な楽器は僅少。ウクレレが、数人。これでオーケストラができる?仕方ない。せっかく集まったんだ。僕はハイドンやモーツァルトをウクレレ入り編成にアレンジして指揮。クラリネットはあきらめた。これが、現在都立高校ではかなり大きな部類と認知される新宿高校管弦楽部の産声である。

そんななかで僕は、東京芸大作曲科受験を決めた。高校2年になる春休みだ。変な奴だ…。 尋常ならざる周囲の視線。とはいえ、音楽に関しては一目置かれる存在と認識されたようだ。 僕は自分のモットーを決める――「鶏口となる も牛後となるなかれ」

2年の秋、僕はようやく切符を入手した来日 有名オーケストラ・コンサートへ行けるのが嬉 しくて、音楽好きの友に話した。プログラムは ブルックナーの交響曲第5番。全く知らない。 だが、詳しい友がいて、その曲のある箇所につ いて質問してきた。どうする?

「今忙しい。明日教えるよ」――彼を除く何人もから金を借りまくり、目の玉が飛び出るほど高価なその曲のスコア(総譜)をその日のうちに買った。徹夜でそれを読む。徹底的に読む。翌日、何食わぬ顔で友に答えた。

「知らない」とは言えないのだ。何だ、あの程度で芸大を受けるのか、と思わせてはならない。音楽好きというだけでは到底届かない高みにいなければいけないのだ、僕は...。

これこそ「鶏口牛後」。僕をそうさせたのは間 違いなく新宿高校だったのだが、実は...。

病弱で小学校就学が1年遅れた幼少期に、往診に来た医者のひと言を僕は聞いてしまっていた――「このお子さんはハタチまでは無理です」…高校時代、これを思い出すのは毎日。何しろ、残り数年もない。当然だ。

「都民劇場」という演劇鑑賞組織に入った。 校門からすぐの超安料金の「日活名画座」で、 洋画の名作を見まくった。学生運動の時代だ。 生意気な政治論争にも加わった。御苑に忍びこ んでは遊び呆けた。ハタチまで無理なら、やり たいことを全部やっておこう――そう考えたの である。

その、やりたいことを全部やらせてくれた場所こそ、新宿高校だった。ところが、いつのまにかハタチを過ぎた。過ぎて半世紀以上が経ったら、あの医者の言葉が脳裡をよぎる日々が戻ってきた。我々新 15 回卒が「いちご会」と称してしばしば集まるようになったのは近年。あの頃ままに驚くほど多様な職種を経てきたいの頃にち。どの顔もまさに高齢者のそれだ。しかし、一様に明るい。この明るさのウラに、あの頃の雑駁さがしたたかに潜んでいる。どのの神駁さがしたたかに潜んでいる。どのの神駁さがしたたかに潜んでいる。とのの神駁さがしたたかに潜んでいる。との神駁さに、感謝!そう感じること、しきりである。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。)